

企業の価値、
地域の価値をつくるために

アキタモノづくりの未来

500号 特別座談会

1981年7月に創刊した「ビックあきた」が、2023年3月号で500号を迎えました。これを記念し、秋田で活躍する企業と専門家による座談会を開催。お集まりいただいたのは、株式会社小滝電機製作所代表取締役の中村英明氏、株式会社齊藤光学製作所代表取締役の齊藤大樹氏、国際教養大学准教授の工藤尚悟氏の3名。

「秋田の10年後のものづくり」をテーマに、秋田という土地でのものづくりのあり方、若者の考え方、人材流出など、今、多くの企業も同じように抱えているテーマについてお話をいただきました。



株式会社
小滝電機製作所

株式会社小滝電機製作所
代表取締役 中村 英明
小坂町出身。大手自動車メーカー勤務を経て、平成元年に帰郷。平成元年にグループ企業に入社。その後2003年に同社に入社後、中国工場の責任者を務めたのち、2019年に代表に就任。



株式会社
齊藤光学製作所

株式会社齊藤光学製作所
代表取締役 齊藤 大樹
美郷町出身。化学メーカーでの勤務を経て、2017年に父の経営する同社に入社、2021年に代表に就任。研磨技術を生かした加工とともに、現在は技術サービス業務にも力を入れている。



公立大学法人
国際教養大学

公立大学法人国際教養大学 国際教養学部
准教授 工藤 尚悟
能代市出身。「農山村地域の持続の可能性」を研究テーマとし、現在は五城目町に拠点をもちながら、地域での暮らしについて調査している。著書に「私たちのサステナビリティ」がある。



国際教養大学の教室をお借りしての座談会。事業内容、地域、世代の異なる3者による、それぞれの立場から見た「秋田のものづくり」が語られていく。

コンプレックスを取り除くために

齊藤 「秋田でのものづくり」を考えるうえで、大きな課題とされているのが、賃金水準ですね。弊社では、賃金を上げて行くためには付加価値の高いものを作り出していくことが必要だと思っています。

一同 うんうん。

齊藤 弊社では、材料表面を磨く「研磨」がキーテクノロジーとしてありますが、それをもとに、大きく2つの業務の柱があります。一つが、お客様からの依頼に基づいた「受託加工」。これまではこれがメインだったのですが、近年、「技術サービス」として、研磨材の製造メーカーなどのコンサルティングサービスの展開もしています。例えば、新しい研磨材の効果をレポートにまとめたり、大手メーカーから研究委託を受けたり。

中村 なるほど。

齊藤 これからは、労働集約型の受託加工から、知識集約型の技術サービスにシフトしていくことを目指しています。「いくら作ったか」ではなく「どんな価値を提供できるか」ということに考え方を変えていくということですね。

中村 弊社は、自動車専用のLEDランプ基板製造をする労働集約型の企業です。世の中に必要なものを、生産技術力の向上により生産性を高め、安く、品質のいいものを生み出しながら利益を追及していくことが会社の価値であり、地元にいる社員を多く雇用し、企業が続けていくことで地域貢献に繋がっていきたく考えています。ところで、齊藤光学さんのような業務のシフトを、社員のみなさんはすぐに受け入れられているんでしょうか？



今からでも、社員さんたちが
いろんな人に出会う機会が
必要だと感じますね。

齊藤 それがとても難しいところで、これからは、量産部門で働く人と技術職の人との壁のようなものがより強くなっていくんじゃないかと思っています。

というのも、量産部門にはコンプレックスを持っている人が多いんですよ。「ものづくりが好き」と面接の際は言っていたものの、入社後、あらためて聞いてみると「学校や親に勧められたから」「大学進学できなかったから」など、自分の本意でなく、外からの理由や消去法で携わっているケースが多い。そういう人たちからすると、技術で輝いている人というのは異次元のように映るし、「俺になんかできっこない」と思ってしまうんですよ。



人と関わるきっかけや学ぶ場を会社が提供するの、重要な任務だと思っています。

中村 うちの量産部門は女性が大半。それを管理するのが男性の役割になっています。いま、女性活躍が謳われるなかで、管理職に就いてもらおうとしても「あの人がばっかり先に立って」とか「私はそこまではしなくていいです」という声が出てしまうんですよ。実際には男性が気付かない女性ならではの目線や、きめ細かさというのは非常に重要な部分なので、そういう仲間を増やして、固定観念をなくしていくことが課題だと思っています。

齊藤 そうですよ。そうすると、会社の理想の中には入って

きてもらえない。なので、小さな成功体験が得られるような教育プログラムや、他社の見学や、ディスカッションする機会を設けて、自己成長の可能性を見出せるようにしたいと思っています。ただ、会社に入ってから考え方が大きく変わったり、人間として成長できるかというところが難しいですよ。

働きがいと、暮らしがい

齊藤 価値観を養うという点で、工藤先生が研究で関わられている五城目町は、さまざまな価値観や多様な人に出会える場が多い印象です。

工藤 先日、五城目で起業された子育て世代の女性たちに話を聞いたんですね。

そのなかで、「夏休み、子どもが1ヶ月休みになると仕事ができないし、子どもは家でスマホやゲームをして終わってしまう」ということから「夏休みの30日間、地元の誰かが先生になって何かを教えよう」ということが始まったそうなんです。「早く走るための講座」「なぜ戦争がおきるか」「ティディベアを作る」など、レベル感は違うのですが、さまざまな人が講師になって、30日間講座が行なわれた、と。

一同 へ～！！

工藤 そのなかで話されていたのが「子どもが18歳になるまでに関わる大人が、親か学校の先生だけというのは、おかしい」ということ。

限られた環境にしか触れていないと、自分が育った環境を再生産することしかできないんですよ。先程、齊藤さんのおっしゃっていたことも、それに近いかもしれません。

そう考えると、子どものうちからいろんな生き方をして



規模が小さい時から積み重ねてきた経験値を、これからの人たちにどう伝承していくかは大きな課題です。



いる大人に出会うことが大事だし、今からでも、社員さんたちがいろんな人に出会う機会が必要だと感じますね。

中村 今、私は55歳。10年後に向けて、次を託す人間をいかに育てるかというのが大きな課題なんです。私は、オーナー家ではありませんが、寝ずに働き、寝ずに遊んだ世代でも、今の子どもたちにそれを求めることはできないのも難しいところですよ。高卒で入社した子どもたちが友だちとの時間が合わないなどの理由で辞めていくケースもありますし。

工藤 今の学生たちを見てみると、「働きがい」と一緒に「暮らしがい」ということをすごく考えているんですね。我々のような、たくさん働いて、たくさん遊んだという世代は働きがいの価値がすごく高く、それにとまって、暮らしがいも高まっていった。それは社会全体が経済成長していたからなんです。30年間GDP成長していないと、「自分はこの環境で働けけれど、同じくらい暮らしがいがあるのか？」ということ、すごく見ている気がするんですね。



学生たちは、暮らしがいと働きがいをバランス良く考えていると思うんです。

アキタのづくりの未来

一同 うんうん。

工藤 そんな中、うちの学生には「秋田、すごくいいですよ」と言う子がすごく多い。彼らにとっては、東京も、ロンドンも、ニューヨークも、秋田とフラットな関係性なんです。

学生には1年の留学制度があるんですが、帰ってきたときに「向こうにはこんないい所があるけれど、秋田にも同じくらいいい所がある」と、当たり前を感じていて、その先に「秋田で就職します」という子も出てきている。それは、暮らしがいと働きがいをバランス良く考えているからじゃないかな、と思うんですね。

中村 暮らしがいというと、趣味や心の豊かさというところでしょうか。

工藤 そうですね。例えば、秋田より仙台のほうがお店があるし、仙台より東京のほうがいい、という世代もいますが、今は通販でなんでも買える時代で、そんなことよりも、日々、ここで自然や文化に触れながら暮らしているほうが楽しい。そこで、多様な大人に会って「あの人が、ここで暮らしていてなんだか楽しそう」という瞬間に、たくさん触れられることが大事なんですよ。

「秋田らしい匂いがする」企業

中村 私が若い頃は「自動車関係の会社に行きたい」という思いがあった。今の子どもたちも少なからずそう思っているかもしれませんが、実はうちも自動車関係の仕事。でも「小滝電機」と聞いても誰も自動車関係の仕事だとは思わないんですよ。

齊藤 確かにそうですね。

中村 そういなかで、昨年、「あきたNEXTモーターショー」に



出展したんですが、我々のブースを見て「え！秋田でこんなもの作れるの！？」と言ってもらえたんですね。知れば、興味を持ってくれる人もいます。

「ここでもできるんだよ」ということをどう広めていくかが大事だと感じましたね。

齊藤 やはり、知ってもらおうための機会が必要ですね。うちでは、地元の高校へ若手社員を連れて行ってワークショップをしたことがあります。「社会人になったらどんな生活をしてそう？」という話になったとき「自分が頑張っても、見合った給料はもらえない」「会社のなかで皮肉や悪口を言われている」という意見が出たんです。

一同 はははは！

齊藤 「うちの社員を見て、そう見えるか？」と(笑)。それは、子どもたちが持っている、大人や地域に対しての「錯覚」であって、それを取り除く場作りが大事だと思うんですが、



なぜそう見えるかという、おそらく、大人がそう言っているんですね。先程、工藤先生がおっしゃったように、同じものをまた生み出すことの繰り返しになってしまう。

工藤 今日の話のなかで「価値」というのが大きなキーワードではないかと。それは、製品を作ってマーケットに出すという価値と、秋田の企業であるという社会的な価値。

五城目町では、一昨年生まれた子どもは22人。ということは、そのままいけば7年後の小学1年生は22人。でも、そこで考えるべきは、人口を増やすことではなくて、22人、どれだけ面白い人を作れるか、ということだと思うんですね。それは、極端にいうと「秋田らしい匂いがする」人。もちろん、マーケットに通用する価値も大事なんです、秋田らしい匂いをする人や企業が生まれてくるのが魅力であり、価値になると思うんです。

不思議とうちの学生はそういうところへの嗅覚があるし、人生の多感な時期に、今、自分が立っている秋田という場所

がどういふところか知りたがるんですね。学生には、大手メーカーや企業を見るだけでなく、フラットに、秋田にもこういう企業があることを知ってほしいと思いますね。



「県外へ出る」ということ

齊藤 私はいまだに若い人たちは県外に出たほうがいいと思っているんです。ずっと地元いたら今の自分はないと思っていますし、いろんな人や価値観、文化に触れないと、秋田だけで人間性を育てていくのは、まだ難しいと思っています。

中村 私も県外に出ることは賛成です。自分自身がそうだったから。今でも「やっぱり外に出てよかったな」と感じることがあります。

齊藤 でも、出てしまうと戻ってこれない人もいますから、できればこのまま秋田で経験ができて、人間的にも豊かになれることを伝えられる形を作りたいと思っています。

工藤 県外から戻ってこなくても、「よく秋田に帰ってくる」という形も一つですね。帰省するたびにただ実家にいるんじゃなく、地域の行事に参加するとか、自分が県外でしている仕事を地元の高校生に話す機会があるとか、そういう関わり方でも良いんじゃないかなと。

一同 うんうん。

工藤 秋田に限らないことですが、一つの土地にずっといると、考えが内に閉じていくんです。「家を継ぐことをどうしよう」とか「墓はどうしよう」とか、それはもちろん大事なんです、それだけになってしまう人と、外に開きながらそういう問題を考えている人って、全然違うんですよ。

私も11年県外にいましたが、それはよかったと思っています。



目の前に何か課題があるとき、ここだけで考えないし、外に情報を求めることが億劫でなくなるんですね。県内にずっといると、そこが怖くなってしまふんだと思います。

今も、高校生に「県外に行きたい人はいますか？」と聞くと、ほぼ全員手を挙げるんですね。

一同 はははは！

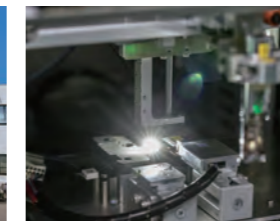
工藤 どんどん行ってくださいって、私は言うんです。「人が減るからあなたはここにいなきゃいけない」と言われるほど乱暴なことはないですよ。

これから大事なのは、「自分が外で見たものを地元を持って帰ったらどんなことが起こるのかな」と、わくわくするような世代を育てることで、企業にも教育の現場にも、そういう探究が必要だと思っています。

アキタのづくりの未来



株式会社 小滝電機製作所



主に車に使用するテールランプ等の車載製品や塗装色を判別するクイック色質センサなどの自動車に関する製品を製造している。『スピード・シンプル・アグレッシブ』をモットーに、高品質かつ短期納品が特徴。2019年にはものづくり日本大賞で、経済産業大臣賞を受賞するなど、常に品質と効率の向上と生産技術力強化に努めている。

〒017-0012
秋田県大館市釈迦内字上袋6番地6
<http://www.otaki-elc.co.jp>
◎設立/昭和55年1月
◎従業員数/220名(2023年1月現在)
◎業務内容/受託設計・受託生産・製品OEM供給・自社製品販売・車載用プリントベースユニット組立

株式会社 斉藤光学製作所



ガラス・半導体材料を磨く研磨において受託加工とコンサルティングサービスとしての技術サービスを展開している。技術と人材確保の両面から、日本の新たなものづくり企業モデル、地域をリードする企業を目指して最先端の取り組みを進めている。令和4年度には地域経済を牽引する役割が期待される企業として、リーディングカンパニー創出応援事業で採択を受けた。

〒019-1512
秋田県仙北郡美郷町本堂城回字若林118-3
<https://saito-os.com>
◎設立/昭和52年11月
◎従業員数/61名(2023年1月現在)
◎業務内容/ガラス・半導体材料の受託加工(外径加工・研磨・洗浄)・技術サービス(受託評価・試験・研究・加工コンサルティング、研磨関連資材・装置販売)

公立大学法人 国際教養大学



2024年4月に開学20周年を迎える国際教養大学。「Be a Global Leader!」を掲げ、世界を見据えた独自のリベラルアーツ教育を提供している。すべて英語の少人数授業や1年間の留学義務・学修・居住一体型キャンパスの環境を通じて世界で活躍できるタフで幅広い視野を持った人材の育成を目指す。

〒010-1292
秋田市雄和椿川字奥橋岱
<https://web.aiu.ac.jp>
◎開学/平成16年4月
◎学生数/841名
◎領域/グローバル・ビジネス領域/グローバル・スタディーズ領域/グローバル・コネクティビティ領域